

『恋するきつねの旦那さま』

著：弓月あや

ill：榊 空也

【p r o l o g u e】

瞼をうっすらと開くと、そこは暗闇。

幼い雪は、もう自分が死んでしまったのだと思った。

(まっくら……)

目を開いても、何も見えない。何も聞こえない。誰もいない。真っ暗な闇の世界。

ここは、どこだろう。

寒さと、どこかにぶつけた身体の痛みと、何より不安が襲ってきて身体が強張る。

(さむいよう)

(こわいよう)

(おなかすいたよう)

(かあさま。かあさま。……たすけて)

三歳になったばかりの雪は、必死で母親を呼ぶ。だけど応えはない。

数日前、その母が亡くなってしまったことが、幼い脳裏によみがえる。

(かあさま、しんじゃった……)

暴力的な悲しみに襲われて、涙があふれ出た。幼い雪にとって、母は全世界であり、全宇宙でもあったのだ。

唯一無二の母親の喪失に、魂が千切れそうだった。

それだけではない。身体中が痛い。手足が棒みたいになっていて、動かない。

まだまだ小さい雪は、パニックになりそうだった。

(こわいよう。こわいよう)

その時に聞こえてきたのは、優しい声だった。

「もうすぐ家に着くからね。頑張れ」

ぴくりと瞼が動く。これは、誰の声だろう。

「家に帰ったら、温かい風呂に入ろう。そうだ、おいしいものも用意するね。きみは何が好き？
まずは温かいミルクかな。きみに飲んでもらいたいよ」

そう囁きながら、抱きしめてくれる。安心できる温もり。

「生きてると、おいしいものを食べたりお花や木や、いろいろなものが見られたり、楽しいことやおもしろいことがいっぱいあるんだ。頑張ろう。死ぬんじゃないよ」

そう囁き続けるのは静かだったけれど、必死な声だ。

(このひと、なにが、こわい、の)

励ましてくれるこの人のほうが、怖いのだ。

懐に入れた小さな生き物が死んでしまうのが怖い。この命を失いたくないと、彼の心の声が聞こえたのだ。

(どうして?)

道端でごみ屑みたいにうずくまっていた仔狐を拾い上げた。そして上等な外套の懐に、迷うことなく入れた人。

そう思った瞬間、冷たかった身体が温もりを取り戻す。

自分が目を覚まさないから、この人を不安にさせている。

それならば、生きなくてはならない。

そこまで考えていた時、額に彼の唇を感じた。

接吻されたのだ。

「死んじゃ駄目だよ。死なないで」

路地裏に落ちていた、どこを這いずり回ったか知れぬ動物に、彼は唇で触れたのだ。常識がある人間ならば、皆が眉をひそめる行為だろう。

「え？ ちょっと動いた」

必死の思いで雪が身じろぎすると、とたんに嬉しそうな声がする。

「動いたのかな。だったらいいな。動こう。早く動いて、楽しいことをしよう。こんなところで、死んじゃ駄目だ」

必死で励ます声は、やっぱり少し震える。

「————もう、誰にも死んでほしくないんだ」

雪がうっすらと目を開く。見えるのは同じ闇。だけど今度は、不安ではなかった。

(あったかあい……)

氷のような指先に、じんわりと温もりが戻ってくる。

冷えた頬に、熱が宿った。それを仔狐は、幸せな気持ちで感じていた。

この人といれば、安全。

守ってもらえる。怖いことは起きない。大丈夫。安心。

だってホラ、こんなに温かいもの。

よかった。この人に出逢えて、本当によかった。

この時あったのは、幼児が母親に抱く、絶対的な安堵。

懐の温もりを感じながら仔狐は目を閉じ、眠りの中に落ちていった。

「————これはまた面妖な……」

仔狐を連れ帰った翌朝。冷泉子爵邸。その屋敷の中の大きな寝台の上で、一嶺は絞り出すような声を上げた。

彼が銀座の真ん中で拾ったのは、真黒な仔狐だった。

連れて帰り顔や両手両足を温かいタオルで拭ってやり、身体を温めた。

……そのはずなのに。

清潔な寝台の上で人間の幼児が、すよすよ寝息を立てて眠っていた。

幼児は三歳ぐらいか。愛らしく丸々として、柔らかい。

誰もが目を細めてしまうような、可愛らしい子供だった。しかし。

こんな子供が家にいることが、ものすごく怪異なのだった。

「この子は、どこの家の子だ。それに、……なぜ真っ裸なんだろう」

そこまで考えて、いや違うと頭を振る。

「何より、どうしてこの子には、耳と尻尾がついているんだ」

丸くなって眠る子には、三角の耳がついている。

丸まっている姿のお尻には、ふかふかの、黒い尻尾がついていた。

「よもや、このような事態が起こるとは」

まじまじと見つめて、溜息をついた。

昨夜この寝台に寝かせた仔狐は、肢が四本。尖った鼻先。何より全身を黒い毛で覆われている、まがう方なき仔狐だったのに。

この子の身体を、熱いお湯で絞ったタオルで、何度も拭いてやったのは一嶺自身だ。間違えるはずもない。それなのに。

「春は、おかしげなことが起こるものだ……」

一嶺は悩みながらも、枕元に置いてあるベルを鳴らした。

すぐに扉を叩く音がして、一嶺の忠実な、側仕えが中に入ってくる。

名を莊寿。彼は少年時代から冷泉家に仕えている。

瘦躯で長身の彼はふだん無口で、一嶺以外の人間に心を開かない。ほかの使用人たちとは慣れ合わず、つねに一人でいることを好んだ。

舶来の眼鏡をしていることから、冷たいと同僚たちに陰口を叩かれている。

ただし、敬愛する一嶺に対してだけは、別だった。

「おはようございます、一嶺さま」

晴れやかな笑顔は、主人への愛があふれている。

もっと詳しくいうと、主人のみへの愛で、ほかの人間への対応は、ごみ屑同然であった。要するに、激しく歪んだ性格の持ち主だったのだ。

莊寿の仕事ぶりは真面目だし、長身で見目がいい。

冷泉家の来客への対応も完璧だったので、客は口々に、いい使用人がいらっしゃるのねと羨むぐらいだった。

だけど彼は褒めの言葉を賜わると笑顔を返すが、心を動かすことはない。なぜならば。

主人と認めたと一嶺以外はどうでもいいと考える、大きな欠陥を持っていた。

ふだんの寡黙で硬い表情の姿しか知らない者が、一嶺に向ける笑顔を見たら、全員がはあ？
と言うだろう、さわやかな微笑だった。

「おはよう荘寿」

穏やかに微笑む一嶺は、まだ十五歳。身長は欧米人のように、すらりと高い。

大正のこの時代、彼の長身は、きわめて稀である。

髪が漆黒でなく明るい茶色だし、彫りの深い端正な顔立ちをしているので、一見しただけだと西洋人にも見える。

今はほっそりとしているが、まだまだ背が伸びるし、逞しくもなる。

冷泉子爵家の若き当主である彼は、年に似合わぬ落ち着きを備えていた。

荘寿は一嶺が己の主人であることに喜びと、喩えようのない誇りを抱く青年だった。

満面の笑みを浮かべながら、荘寿は部屋のカーテンを開けていく。

「今朝はよいお天気でございます。朝の紅茶をテラスにご用意いたしましょうか」

「うん、それは素敵だね。でも、それよりこれが」

「なんぞございましょう」

ひょいっと主人の手元を覗き込み、大きな声を上げる。

「その子供、何奴でございますか。なぜ一嶺さまのご寝所に、このような妖怪が」

耳と尻尾が丸出しの全裸。妖怪というほかないのは、当然だ。

「うん。私も、びっくりした」

「もっと驚いてくださいませ。尻尾と耳を生やかしておりまする」

荘寿の慌てた声に、一嶺はちょっと冷静になってしまった。

「うー……ん。拾ったのは仔狐だったのになあ」

「一嶺さま、呑気すぎます」

「あははは」

「あはははではございません。昨夜、連れ帰ったのは、黒い仔狐でございましょう」

「まさしく、その通り」

確かに一嶺が連れて帰ったのは、小さな黒狐。

こんな子供を襟元に入れて、歩けるわけがない。

出迎えた荘寿が、汚いものを拾ってきた一嶺に、眉をひそめた。

彼はあろうことか、捨てましょうとまで言いきったのだ。さすがにそれは実行しなかったが、本気だったはずである。

だが冷ややかに言いながらも、湯を沸かしてくれたのだ。

では、あの狐はどこに？ そして、この子供は誰？

「あの小汚い黒狐が、なぜにこのような幼児に変化しておるのですか」

荘寿は動揺が隠しきれない。

「なんでなんだろうねえ。とりあえず、ちょっと静かにしておくれ」

一嶺の一言に荘寿はピタリと黙る。彼にとって主人は絶対だからだ。

「ちびちゃん。きみ具合はよくなったみたいだね。よかった」

優しい声で話しかけても幼児は目を開かないが、寝息は健やかだ。

それを見て緊急性はないと判断したのか、一嶺の声が柔らかい。

「熱もないし、肌も桃色。尻尾の毛並みも綺麗になっている」

しかし、瞼がピクリと動いた。そしてそれを一嶺は見逃さなかった。

「でも、なぜ人間になったのかな。子供でもいいけど仔狐のほうが可愛いのに」

この呑気な言葉に、荘寿が身悶えする。

「そういう問題ではございません！」

荘寿の叫びを聞いても、まだまだ子供は目覚めない。ふっくら頬っぺは林檎色。一嶺はそれを指先でなぞってみる。

「荘寿、この子に着せられるような服は、当家にあるかな？」

「はい。一嶺さまがご幼少の頃にお召しになった洋服がございます」

「私の？ そんなもの、まだ取ってあるんだ」

「もちろんでございます。一嶺さまのお召し物は、赤ん坊の頃の産着から浴衣にいたるまで、すべてこの荘寿が完璧に管理、保管しております」

「……そうなんだ」

「わたくしが微に入り細を穿つように、月に一度の虫干し、半年に一度の洗濯をしておりますので、新品と見まがう状態でございます」

「そ、そうか。ありがとう」

「とんでもございません。一嶺さまのお洋服の手入れができることは、わたくしにとって、至上の喜びでございます」

荘寿の声がどんどん大きくなるのに、一嶺の声は、どんどん小さくなっていた。

「じゃあ、この子に着せられる服を……、いや、尻尾があるから、洋服でなく浴衣がいいかな。それと、ミルクを温めて持ってきておくれ」

「かしこまりました」

すぐに厨房へ行った側近は、ほどなくして銀のトレイを持って戻ってきた。

彼が手にしていたトレイに載るホットミルクは、厚手のカップに入れられている。一嶺はそれに蜂蜜を垂らし、スプーンでかき回した。

「おいしそう。蜂蜜入りのホットミルク。早く飲まなきゃ冷めちゃうよ。起きて起きて」

一嶺はそう言いながらカップを子供の鼻先へと持っていった。

ふんわりミルクの香り。

そのせいで、ぐうううううと景気よく鳴った。もちろん腹の音だ。

ゆっくり顔を上げた耳つきの子供は、ひくひく鼻を動かした。温めたミルクの香りは、さぞかし魅惑的だったのだろう。

「起きないと、なくなっちゃうよ。ほわほわミルクが」

「みるく！」

がばっと起き出して、きょろきょろ辺りを見回し、ミルクを探している。

実に欲望に忠実だ。

「まだ熱いから注意して。ふうふうして飲みなさい。蜂蜜が入っていて、おいしいよ」

耳と尻尾だけついた裸の子供は、差し出されたカップを両手で受け取ると言われた通り、ふうふうした後、うっくうっくと上手に飲んだ。

一嶺はその小さな肩に、やわらかいガーゼのタオルをかけてやった。

間もなくメイドが子供の浴衣を持って、扉をノックした。荘寿が受け取り、すぐに扉を閉める。まだ正体不明の幼児がいることを、使用人に知られまいとしているのだ。

そんな気苦労性の側近の気持ちなど知る由もない幼児は、ひたすらミルクを飲んでいる。カップが大きく小さな身体なので、まるで洗面器を抱えているようだ。

やがて顎を反らして飲み干すと、ぷはーと吐息をつく。

一嶺はそんな様子を片肘つきながら、にこにこ見つめていた。

「おいしかった？」

「う」

ミルクのひげがついた顔で返事をされ一嶺は笑い、控えていた荘寿は眉をしかめる。

「一嶺さま。そろそろお着替えをさせていただきます」

荘寿の一言に一嶺は「ああ、そうだった」と思い出したようだ。

「ねえ、きみ。浴衣に着替えてもらってもいいかな」

「う？」

「可愛い尻尾が丸見えになるでしょう。大事にしまっておこうよ」

「うー……」

幼児が渋っていると、重々しい声がした。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>